

小説家の創意とスタイル

—Arnold Bennett の *The Old Wives' Tale* に関する小説論的考察—

高 城 檻 秀

サマセント・モームがアーノルド・ベネットの『老妻物語』(*The Old Wives' Tale*)を批評して次のようにいつていふが、今日この小説を読む読者によく分かる批評である。

「リアリズムも流行であつて移り變る。読者が小説に空想や、ロマンスや、興奮や、サスペンスや、驚異をもとめるとさには、彼等はアーノルドの傑作を陳腐で退屈だとおもうだらう。振子がもとに戻つてきて、読者が素朴な真実や、真実らしいことや、常識や、愛情にみちた人物描写をもとめるとあは、彼等は『老妻物語』にそれをみつけるだらう」(*The Vagrant Mood* p. 230)

たしかにモームのいうように、ベネットの『老妻物語』は地味でしみじみした人生の物語である。読んでいるうちに、なんとも古臭い描写に出会したり、退屈したりするが、それ

でも人生の真美らしいものにふれた氣持になる。そこには思想の対決とか、天馬空を駆けるようなロマンスはないが、生活にどつしりと根をおろした人生觀や愛情や悲哀がある。この小説の主人公は英國の田舎町の洋服屋の娘、コンスタンスとソファイアの二人であつて、姉の落ち着いた引込み思案な性格と妹の浪漫的でりながらも生活力のある性格とが対照的に並んでいる。それにもかかわらず、この小説を貫いていいるテーマは人生の忙しい愛情の歴史である。僕達はこの小説を読みながら人生らしい人生を眺めているおもいがするのである。

しかしながら、僕達の眼を五十年前に遡のばらせてみるとベネットのこの傑作はいま僕達が眺めている姿と違つた姿になる。当時——初版の一九〇八年の少し前であるが——ベネ

ットはパリの郊外に滞在してフランスのリアリズムを研究していた。フローベールやモーパッサンの文学はベネットのような世纪末の文学青年には新しく花々しい文学であつた。彼の言葉でいえば、フローベールは勿論のこと、モーパッサンの『女の一生』は一八九〇年代においては小説の極致に達した作品と考えられていて、彼のようにパリで遊んでいた文学青年は口もきけないぐらいの畏敬の念をもつて見たものであつた。そして彼はこの新しい文学に傾倒して、彼は彼なりに自家薬籠中のものにしたのである。

彼はフランスのリアリズムを研究して、『五つの町のアナ』(Anna of the Five Towns, 1902) や『老妻物語』でそれを実践したが、その英國小説史的な意味は、彼がフローベール流の客観的描写法をもつて、ヴィクトリア朝風の従来の小説の伝統を一応否定したことであつた。彼はこの『老妻物語』を書くにあたつて、新人小説家としての二つの態度を意識していた。それは作者が一九一二年版に新たに書き加えた序文のなかでいつているように、まず「作者が主人公に同情をもたなくてはならないのは絶対の掟である」という態度であり、つぎに「リアリズムの小説の傾向は主人公達を変りものにすることに反対する。群衆のなかに入れば目立たなくなるような人物を選ばねばならない」という態度であつた。ところで第一の態度は別段新しいものではない。一人一人の小説家をとりあげて、彼等の作中人物に対する愛情をしら

べてみれば複雑な様相を示すにちがいない。しかし一般的にみれば大抵の作家は自分の主人公に愛情をいだいている。だからベネットも第一の態度を小説家の「絶対の掟」であると呼んでいる。彼は、英國小説のみならず、小説一般の伝統的な作法を作家の立場からそろ理解していたのである。しかしながら彼の第一の態度に対する意識に光をあてて、彼の心の奥をさぐつてみれば、それは彼自身が意識していたほど簡単なものではない。なるほどベネットはこの小説の主人公のコンスタンスやソファイアや副人物のクリッチロー氏をはじめとする人物達に素朴な愛情をいだいていたが、だからといってその素朴な気持もけつして額面通りに受けとることの出来るような品物でない。簡単にいえば、彼は主人公に愛情をもつていたものの、心の底のどこかで高踏的な場所から彼等作中人物を見下していたのである。ベネットは新しいフランス文学を研究したインテリであり、芸術の道を一生歩む小説家である。ところが一方彼の愛する作中人物は（少くとも『老妻物語』の人物は）彼の故郷の田舎町の泥臭い連中である。そのうえベネットという男は大変器用な才人であつて、才人がありがちなスノバリーも身につけていたのである。あれやこれやの事情から、彼はコンスタンスやソファイアや、クリッチロー氏を愛し慈しみながらも、「作者は主人公に同情をもたねばならない」と言い切つたほどには素直になれなかつたのであろう。

第二の態度は第一の態度にくらべて新しい意味をもつていて、第一の態度よりも比較的簡単に、あるいは素直に実践されている。というのは、彼は、フローベール流のリアリズムの基礎をなしている典型、という観念を平均、という観念としたが、めらうこともなく同一視して考えていたからである。ボヴァ夫人やジャンヌがその時代の典型的な人間像であり、同時に個人であるという小説の方法論を、ベネットは群衆のかに入れれば目立たなくなる人物を主人公にして小説を書けば達せられると安心して考へていたのである。僕はベネットのリアリズム解釈を浅薄だと考へている。何故ならば典型といふ個人といふ、それらの観念は人間性のうえにたつてはじめて成立し得る観念があり、群衆という言葉であらわされる人間の数量的な拡がりとはまったく別のものであるからだ。極端にいえば、典型であり個人である人間を描くためには、少しぐらい変りものでもよいからにかん間性のきらめきをもつている人物を主人公にする方が、ただ群衆の一人であるからだけの平均人を主人公にするよりははるかに正しい書き方だと僕は考へている。それはともかくとして、ベネットは幸か不幸か、自分のリアリズム解釈に対してなんらの疑いもいだかなかつたのである。それで彼は自分の小説中の人物を創造するにあたつて、英國の田舎町の平凡な男女の間からコンスタンスやソファイアを勇敢にしかも安心して創りあげたのであつた。

いまのべたように、ベネットのリアリズム解釈は勿論浅薄である。だが彼の才人的才能はそのような浅いリアリズムをもつてしても、英國の小説史上に當時としては重要な役割を演じてみせたことを僕達は忘れてはならない。彼は巧妙にも、自らの解釈をヴィクトリア朝風の小説の伝統のアンチ・テレゼにおくことによつて、反ヴィクトリア朝的流行の波にのり、新人としての意味を獲得したのであつた。ヴィクトリア朝風の小説の特徴についてはいろいろに語ることが出来るところもうが、ベネットはそれらのヴィクトリア朝風の小説の特徴のなかから一つの重要なエレメントをみつけ出していつたのである。たしかにデッケンズの小説には一風變つた人物がいる。サッカレーの主人公はデッケンズのそれと違つた意味で平凡ではない。シャーロット・ブロンテの人物も、ステイヴンソンの人物も群衆のなかに入れば目立たなくなるような人間ではなかつた。彼等は大体においてあまりにもキャラクタリストイックな人物である。ベネットが眼をつけたのは十九世紀の英國の小説の中の人物の姿であつた。その当時の事情からすれば、彼が「リアリズムの小説の傾向は主人公を変りものにすることに反対する」と宣言したことは、立派なフランス土産であり、ヴィクトリア朝風の小説の否定になつたのである。小説家が主人公の性格をキャラクタリストイックな点で把握するか、ベネットのようにリアリズムのいう典型で把握するかは単なる創作技術の問題にとどまらず、

さらに小説家の人間觀までに發展するものである。ベネットのリアリズム宣言は小出しであり、微温的であつたが、このように新人的意味を充分にもつていたのである。

二

ベネットが『老妻物語』を書かうとした動機については、興味あるエピソードがあるが、この話はかなり有名であるから簡単に紹介しておく。一九〇三年の秋のある夜のことであつた。彼はパリの小さなレストランで食事をしていた。ちょうどここに一人の年とつた女が居合させていたのである。この老婆は醜く太り、下品で、身振りも話も奇矯であつた。店内の人々はこの老婆の姿を見て当惑したり腹を立てたり罵んだりしていた。そのとき、ベネットは若くて美しいウエートレスがこの年とつた女をさも軽蔑しきつた顔で眺めているのを見ちらつとみて、感慨をいだいたのである。——この老婆にも姿心の若やいだ少女時代があつたはずである。こうした人生の移り變りにはペーソスがある。しかも、少女から老婆に移深まつていく、と。

このエピソードはさきにあげた一九一二年版の序文のなかでもいつているが、一九〇三年十一月十八日附の日記にも出ていて、間違いない事實である。しかしながら僕達が注意

しなくてはならないことは、ベネットの動機のなかには、こうした感概以外に、モーパッサンに對して新人としての対抗意識をもつていた事実がある。同じ序文のなかでこういつている。「僕は心のなかでひそかにこう決めた。僕の書く少女が肥つた老婆に移り變つていく小説は英國の『女の一生』でなければならぬ。僕は大抵の缺點をもつてゐるが、自信だけは缺けていると非難された覚えがない。だから数週間たつと一步前進することにした。僕の小説は『女の一生』をこえねばならない。このために、僕はこの小説がただ一人の女の一生でなく、二人の女の生涯でなければならぬと考えた。そういうわけで『老妻物語』には女主人公が二人いる。コンスタンスはもとから主人である。ソファイアは僕がギイ・ド・モーパッサンを目指して小説氾濫の最後の先駆者と考えないと示したいめの強がりから創作したのである。」もつともベネットがモーパッサンに對して対抗意識をもつてこの小説を書いた事実には幾分疑いがある。十一月十八日の日記の方では彼はモーパッサンよりは他の小説家に言及している。

「……この小説の調子に關しては、僕は『イヴァン・シリチ』(Ivan Illyitch) のことを考へ、構成上の技術に關しては『農園の娘の物語』(Histoire d'une fille de ferme) を考へた。これらの二つ線は交錯しなければならないだろう。僕は目の前に作品全体をほつきりと想像し、それを書きたいと希望した。」

またある批評家 (M. Lafourcade) はベネットがそのときバルザックを心に思い浮べていたらうといつてゐる。だが、ベネットがモーパッサンに対して誰よりも対抗意識をもつたと僕は考へたい。といつて僕は『女の一生』と『老妻物語』との人物の間にこれといえるような影響があると考えてゐるのではない。『老妻物語』の人物でモーパッサン影響をもつとも強くうけているとおもえるものはコンスタンスと息子のシリルであろう。しかも、この二人の人物が『女の一生』のジャンヌ母子に似ているといつても、この程度の似方ならモーパッサンの主人公をまつまでもない。僕がベネットのこの作品に『女の一生』の影響を強くみるのは、これら二つの小説が同じ時の流れに浮沈する女の生涯をテーマにしてゐるからである。E・M・フォースターのいうように (*Aspects of the Novel*, p. p. 38—39) この小説の本当の主人公は時の流れである。そして時はこの小説で絶対者であるのだ。コンスタンスは時の流れの生んだ子供であり、この小説にはじめて登場して母親のドレスをいぢつてゐるときからそうである。彼女は結婚し、シリルを生む。やがて少年になつたシリルは不良化し両親を落胆させるが、そのうち母親は未亡人になる。一方はなやかなソファイアも時の流れの子供である。彼女は家出してパリに住むようになるが、父の死顔もみられないような生活をしている。そののち夫に逃げられてパリで落ちぶれるが、持前の勝気と利巧な生活術によつて下宿屋の

女将になる。年とつてから彼女は姉の家に帰つてくるが、そこで彼女の出会わしたものは、裏切つた夫の惨めな死のしらせと、姉の死と、それから自分の死である。ベネットはこの小説で、われわれ人間の日常の苦みは、若い娘から肥つた老婆に移り變つていく女の一生にみられるよう、年々年寄つていくことだと語つてゐるのである。彼の言う人生哲学には嘘はない。彼はこの余りに人生的な人生觀のうえに腰をおろして、時の流れの移りゆく有様を落ちついた筆でじつくりと書いてゐるのである。『女の一生』のジャンヌが時の奴隸であつたように、コンスタンスもソファイアもまた時の支配下に住む小さな人間である。

III

ベネットはこのようにして『老妻物語』を書こうと思つたち、準備を重ねた。彼は氣負つたついた。
だがそうしたとおども、彼は一寸とした趣味を楽しむ余裕をもつていた。

「私はアーノルドの筆蹟を高く買つていましたので、出版された本の草稿を紙屑箱からよく取り出しました。また私は夫が古い書体で字を書いて得意になつてゐるのを面白くおもつていました。アーノルドはそのことを知つていましたので彼は私の望む書体で自分の傑作を書かせました。」(My Arnold Bennett be Marguerite, his wife. p. 56)

これはベネットのフランス生れの夫人が語つてゐる言葉である。

いや、僕はベネットの身辺の事情を書くつもりはなかつた。僕の目的は、彼が『老妻物語』を書くに際していだいた新人としての意識が創作上の実践に如何にあらわされているかを研究することである。彼は、作者は作中の主人公に愛情をもたなければならぬと考えていた。そしてそれが小説を創作するときの絶対の捷があると考へていたのであつた。彼は有名な小説家が傑作を書くときに度々故郷を舞台にする便利をしついていたので、モーパッサンが『女の一生』の舞台を故郷のノルマンディーを選んだように、彼もまた「五つの町」という英國の田舎の陶業町を選んだのであつた。そうすることによつて、ベネットはその町に生れ育つた人でなければ感じえない愛着と、細かい事柄に関する知識を小説中に活用したのである。

英國の中部地方の地図を開けてみると、ストウク・オン・トレントという小都市がある。今世紀のはじめごろにはまだ市政も布かれていらない田舎町であつた。そこは屋でも暗く濁つた煤煙の幕が空に垂れている陶業地で、町民はけちくさく野卑で、あくせく忙いでいた。いわば五十年前の英國の地方都市の一つの典型的な町である。ベネットはここで生れ、後年自分の小説のなかでここを「五つの町」と呼んだのである。ベネットといえば「五つの町」を思い出させるほど、彼の

文学と故郷のこの町は縁が深いのである。

はじめにも言つたように、僕は、ベネットが自分の小説中の主人公に対して愛情をもつていて、彼の気持にはまた高踏的なスノーバリーもふくまれていたとおもつている。そしてこれは、彼が故郷の町の人々に対する愛着のありのままの姿の直接的、間接的な反映であるといえるだろうともおもつてゐる。ベネットは「五つの町」から出てパリに遊んでいたインテリである。モームはそのころ彼とパリで交際していたが、モームにいわせれば一寸氣障なタイプのインテリであったようだ。ベネットにとつて、「五つの町」は懐しい町であるが、一面、田舎町出身のインテリの例にもれず、彼は自分の故郷をなんとなしに氣恥しい野暮な町だと考へていたのである。

モーパッサンの『女の一生』にあらわれたノルマンディーと『老妻物語』の「五つの町」とは、ともに作者の故郷であるが、故郷の人間である作中人物に対する作者の愛情のあり方は随分違つてゐる。モーパッサンはジャンヌその他の人物を冷静に突きはなして愛している。彼がノルマンディーの人々に軽蔑の気持を露骨にあらわしているのは、この小説ではジャンヌの夫が妊娠させた女中を小作人の青年がお金欲しきでもらひに入る場面以外にあまりない。モーパッサンはジャンヌや彼女の家族をフランスのかなり上流の家庭の血を受けている人間として描いた。ジャンヌは世間的には無知だが、あ

る程度高貴な美しさのなかで暮している女である。彼女は社会や性に打ち負かされて、冷酷な時の流れの奴隸になるが、彼女が孤独な夢想に耽つてゐるときは知性や慎しみやはにかみや、鋭敏な感性を彷彿とさせることの出来る女である。多分、作者モーパッサンが『女の一生』の人物達に自分の感性や知性を直接移植しえると考えたと僕は想像している。少くとも階級的なセンスにおいても、作者はジャンヌをその世間的な愚しさにもかかわらず身近に感じていたことは間違いない。

勿論自分より上の人間とは考えていなかつただろうが、自分より下の人間だけはけつして考えていいなかつたであろう。モーパッサンはジャンヌを客観的に描写するだけの冷静な愛情と闊達な批評精神をもつてゐたのである。

ところでベネットの事情は違つてゐる。彼は、小説中で「五つの町」と呼んだ陶業地の故郷の町で弁護士の家に生れて幸福に育つたが、彼の両親に文学や芸術の教養はそれほどなかつた。彼は故郷の町では紳士の家庭に生れたが、モーパッサンにくらべると、彼の両親は実利的で、宗教的に厳格な教育を子弟教育のプリンシブルにすることだけに自負をもつてゐるような人達であつた。彼にはモーパッサンの母ロオラのとき才あり色ありといつた母親に恵まれていなかつた。そのうえ、ベネットは大変器用な才人であつた。田舎町から出てきた才人にはえてして自らの才氣をもつて身を飾り、両親や故郷の人達の気質を変に恥しくおもつてゐる人がい

る。彼は小説は書く、通俗物ものを書く、劇を書く、ジャーナリストとしても活躍するかとねもえば、金を儲けて大邸宅を買つたり、ホテル生活をしたり、遠洋航海用のヨットを乗組したりするほど、世俗的にも巧に生活したのである。モームは彼の小説（とくに『老妻物語』）をかなり高く評価しているが、彼の世間的な器用さやお体裁を嫌つてゐた。『気まぐれなるままに』（*The Vagrant Mood*）のなかの『私の知つてゐる小説家達』（*Some Novelists I have known*）で、彼昔はのベネットを思い出しながら、ロンドンの成功者の一人になつた彼のいかにも成功者然とした生活ぶりを皮肉な調子で讀めている。また『要約すること』（*The Summing Up*）では、モームは彼を真向からきめつけて、彼奴は流行作家になつてからロンドンの上流社会を描こうとしたが、田舎者の故郷は田舎であり、ロンドンのホテル生活は所詮根無し草であつたので録なものが出来なかつたと書いてゐる。

僕はモームがいうほどベネットを俗物だとは考へていない。まあいえ、ベネットはモームと同じぐらい俗物か、モームより少し俗物であつたとおもつてゐる。多分『老妻物語』を執筆していた当時は、功なり名とげたときよりは大分純粹な文学精神をもつていてあらう。しかしながら彼が故郷の「五つの町」の人々に愛着を感じながらも、自分の方が上等な人種だという意識をもつてゐたことは間違いないと推測しているのである。そしてさらにすすんでいえば、W・アレンの指

描しているように『老妻物語』のユーモアは、多分作者の故郷の人に対するこの高踏的な愛情から生れていたのだろうと考えているのである。たとえば、「五つの町」の人々がサーカスの暴れ象を射殺する場面のヨーモラスな筆致などは、作者が故郷の人々の気質をひやほり知り尽し、愛しているものの「……しかし私は……」といわざるをえない彼の世俗的な虚榮心の文学的に一ひねりされた表現ではあるまいか。「象は低くひかりとぶら音をたてて引つくり返り、直ぐ死んでしまつた。群衆は喝采した。そこで志願して出た射手達はすくから得意になつて、わらに三度屍に一斉射撃を浴びせたが、英雄気取りで彼等の宿舎へ引揚げて行つた。象は他の二匹の仲間の手助けで鉄道貨車に乗せられて、夜の闇に消えた。バーブリーではいままでなかつた、これからも恐らくあるがるふるふるいな大ヤンヤーンがお起つた。」

(He died instantly, rolling over with a soft thud.

The crowd cheered, and, intoxicated by their importance, the Volunteers fired three more volleys into the carcase, and were then borne off as heroes to different inns. The elephant, by the help of his two companions, was got on to a railway lorry and disappeared into the night. Such was the greatest sensation that has ever occurred, or perhaps will ever occur, in Bursley.)

この一節は特別新しさもない文章だが、象の死を書くことによつて町の人気を巧みに伝えている。生れるのを町の広場で射殺するように措置した官憲。銃殺に喝采をおくる野次馬。英雄気取りで三度一斉射撃を浴びせた兵隊達。その夜の町の興奮。平和を愛するが、もし大都会の子供達がこの光景を見たら殘忍としかおもえないような事件に熱狂する粗野な町民の氣質が描かれている。そして僕は、「象は他の二匹の仲間の手助けで鉄道の貨車に乗せられて、夜の闇に消えた」という文章に、描写のなかに押し詰められた作者の高踏的な（いや、ひよいとする）過激的かもしれないが）微苦笑を読み出せるのである。

また、このような描写のなかに押しこめられたユーモアの他に、もつと開け放しの笑いが『老妻物語』の至るところにある。サムエル・ボヴィー氏の歯の治療の場面もそうだし、コンスタンス姉妹の父親の病気の描写もそうである。その他一つあげていけば相当な数になるとねむつたが、大体のところ全篇の半分以上の文章にユーモアがたどりていて、いひても過激でないだらう。僕はいま全篇の半ば以上といつたが、その意味は、この小説を読んだ人なら知つてゐるように、金四部の物語の前半の二部が「五つの町」を舞台にしているからである。そして第三部のパリのソファイアの部分を除くと、第四部は人生の作ひしむをしんみり語つてゐるのである。、やんこやぱり前半のユーモアが流れているのである。

しかもこの小説を理解するうえで必要なことは、この小説の女主人公達が作者の見下す町の人と同じ平面にいる事実である。コンスタンスもソファ・イアも「五つの町」の子であるのだ。話をモーパッサンにもどせば、ジャンヌはノルマンディーの社会の上層に住んでいる。そして作者モーパッサンは、ジャンヌに対するときと、農民達に対するときと違つた態度で臨んでいるのである。ジャンヌの夫と密通して妊娠した召使を、お金欲しさで嫁にしようとする若い農夫も『女の一生』の副人物にちがいないが、実社会においてそうであつたよう

に小説中でもジャンヌと同一平面で取扱われていない。この

点コンスタンスもソファ・イアもジャンヌなしでは生れてこなかつた人物だろうが、ジャンヌとまったく別の世界の女達である。

ある「五つの町」の人々を描写するにあたつてベネットが微苦笑を口元に浮べていたように、コンスタンスやソファ・イアを描くときにも同じように彼はその笑いを忘れていないのである。

僕はアレンの『ぐねぐね研究』(Walter Allen : *Arnold Bennett, p. 69 (The English Novelists Series)*) London, Home & Van Thal Ltd., 1948.) のなかの言葉で氣附いたのだが、ベネットはこの小説の第三部では微苦笑を浮べていないのである。ところは第三部の背景はパリであつて、この大都會に憧れていたベネットがパリ人種に対しても……しかし、私は……という気持にならなくて済んだからだらう。

アレンは相当穿つて考え過ぎているかもしれない。だが僕もまたアレンのよううに考えてみたいのだ。何故ならば、繰りかえして言うようだが、ベネットは「五つの町」に育ち、「この町に生れた子供ならでは知り得ない」ような細々とした町の噂まで知つていて、深い愛着を感じていたが、彼のところの奥底のどこかで自分の故郷を田舎町だと卑下している様子がみられるからである。そして僕は、『老妻物語』のスタイルの性質に強く惚きかけているユーモアが、作者の故郷に対する高踏的なスノバリーカラ生れてきているとおもつてゐるのである。

四

『老妻物語』のような作風は英國的小説に稀れである。いかにも英國的なローカル色をもつてゐるが、それでいて英國の多くの小説とどこか異質なスタイルがある。この小説にはディケンズの天才の氾濫もサッカレーのアイロニカルな表現もメレディスの莊重さもハーディの悲壯美もない。だがこの小説は作者の客觀描写の奥に人生的な愛情とユーモアに彩られた文学をもつてゐる。またいうまでもないことであるが、『老妻物語』には現代の英國の小説家の激烈さや苦惱や不安はない。この小説を読んでD·H·ロレンスの『恩子と恋人』(Sons and lovers) を読めば、その出版の年が僅か五年しか違つていないので、どうして小説のもとめるものがこうも

違うのかと不思議におもうほど違つてゐる。『老妻物語』のコンスタンスやソファイアの道徳や性に対する考え方方はまったく文学以前の常識である。断つておくが僕は常識を軽蔑しているのではない。ただ、文学のふるいにかかつてない常識は常識としての価値をもつていても文学的な価値をもたないというだけである。ベネットによつて書かれた『老妻物語』の道徳や性に関する考え方方は彼の故郷の「五つの町」の人々の所謂健全な風儀心のもつそれである。いやこの際、ベネット自身がどのような道徳観や性に対する考え方をもつていたかは、この小説に関するかぎりでは問題にならないのだ。ベネットはあくまでも小説を書く側の人間であつて、この小説の主人公達が作品のなかの道徳観や性に対する考え方を形づくつていくのである。作者ベネットは歳月の推移のもつ人生的な意味を主人公達を通して客観的に描写しているだけである。そこには『息子と恋人』のポール・モレルの苦悩にみちた青春のめざめなどは毛頭ない。ロレンスはポール・モレルを小説中的人物として小説的に造型しながらも、自分の青春を半自伝的に投影してはいたのである。ポールの苦しみは性の悩みであった。それは自己の充実を性に賭した一人の青年の不安、分裂、闘い、悲哀の物語である。ポールのエゴの確立は、作者ロレンスのエゴの確立と同じように、母親の異常な愛情の鎖から脱出することからはじまり、幼友達の少女の精神主義的な愛情の虚偽を見破り、年上の既婚の女の人生

のかげにかくされたカリキュレーションから身を退くことであつた。ところがベネットのこの作品にはそのような文学精神の一片も見当らない。まずははじめに作者は作品の「外側」に立つてゐるのだ。なるほどコンスタンスやソファイアにも恋愛があり、夢があり、叛逆があり、倦怠、悲哀がある。しかしながら、コンスタンスとソファイアは互いに対照的な性格をもつた姉妹でありながら、しかも彼等は時の流れのなかに住む平凡な田舎女である点において共通性をもつてゐる。彼女達は人生を批判する。だが彼女達にとつて生活の原動力となるものは、彼女達自身の人生批判ではなく、逆に歳月の流れというものによつて象徴されている人生からの批判によつて行動する精神である。彼女達に主体性がないわけではない。彼女達の主体性が時の流れという人生の本質に従順に従わされているのである。僕がさきに『老妻物語』のテーマは時の流れであり、主人公達は時の奴隸であると書いたが、実はいま僕のいつた意味で書いたのであつた。そしてここでさらに、僕は作者ベネットはこのような主人公達を描写しながらあくまで作品の「外側」に立つていて、物語の語り手としての位置に安定していたことを附け加えて書いておこう。

但し勿論例外があるのである。パリにおけるソファイアは時の奴隸に安んじていないのである。僕はパリのソファイアの第三部を読みながら胸の熱くなるおもいがした。ソファイアの人生

に対する戦いは平凡な女の夢破れたのちの日の再起であつて、地を這うがごとき凡俗な戦いである。それは、ポールがエゴの自由を熱愛するために戦つた青春の争いとは違つてい。だが僕はポールの苦悩に身近なものを感じたことは別な感じ方があるが、パリのソファイアの人生の戦いに敬意を表したい。凡俗ではあるが、平凡な女なるがゆえに平凡な女の生きていく戦いがあるのだ。チ・ブルジョアの女の小利巧さやけちくさきや虚榮心——それにもかかわらず僕はソファイアの戦いが相当程度純粹であり、白熱している事実を認めたのである。僕は前の章で、W・アレンにサジェストされてこういつた。作者ベネットは主人公達を愛し慈しみつつも高踏的に微苦笑を口元に浮べて彼等を描いたが、パリの第三部だけはそこが彼の憧れの街であつたために、彼のスノバリーは……しかし、私は……といわなくとも済んだのだ、と。僕はアレンの尻馬にのつてかなり穿つたようなことをいつたが実のところ僕の本心はそのように他人の文章の裏をうかがうような気になれないのだ。僕はこの第三部で、ベネットが人生の平凡な戦いにも案外輝くような純粹性があるので真面目に語つていると考たい。だからこそ、彼の口元からあの微笑が消えたのだろうと僕は自分の考えをあらためたいのである。この章で、作者は主人公と美しく静かに共鳴しあつてゐる。僕は考えている。V・ウルフはかつてゴールズワージとH・G・ウェルズとベネットをあげて、この三人をマテ

リアリストだと否定して、そのなかでもベネットを「もつとも罪の深い男であり、職人的腕前は群をぬいて素晴らしい」こと非難した。(The Common Reader, 1st Series p. 186) だが、あのウルフでも、『老妻物語』の第三部のソファイアの精神を、単なるマテリアリストのアルチザン的な描写による表現にすぎないと果して断言しうるであろうか。僕はそう考えないのである。

五

『老妻物語』のスタイルの最大の特質はその自然さである。この場合、僕の使つてゐる自然さという審美的用語の意味には無限に近いヴァリエーションの含まれてゐること注意しなければならない。スタイルの自然さといつてもそれは千変万化のあらわれ方をするものである。『老妻物語』の場合にはそれは、小説の進展につれて、十九世紀末の英國の田舎町の生活が時の流れにそつてごく自然に連続していく姿になつてあらわれてゐる。繰りかえしていうことになるかもしれないが、この小説には、コンスタンスの引込み思案な愛情や苦しみや哀しみがあり、ソファイアの浪漫的情熱や中産階級の女に特有な生活の打算があるが、人生の変化と呼ばれるほどの変化はない。舞台背景には「五つの町」でのダニエル・ボビーの殺人事件や、パリの処刑場の描写や普仏戦争での包囲戦などがあつてかなり賑かであるにもかかわらず、コ

ンスタンスもパリのソファイアも平凡な人生の道を歩いている。パリのソファイアはなるほど一見波瀾にみちてゐるが、彼女もまた中産階級の女の生活からはみ出ることの出来ない女である。彼女は男と手をとりあつて家出してあざむかれて貧乏するが、彼女のそのときの夢はもとの生活をとりもどすことである。この小説には、ベネットと同じシェネレー・ショーンの作家ゴールズワージィの『フォーサイト家物語』の知的な複雑さではなく、またH·G·ウェルズの『トーノ・バンゲイ』の近代商業のロマンスもない。あるものは田舎町の泥臭い生活の匂いと、平凡な人生絵図と、佗びしさだけである。敢えて人生の変化らしいものをもとれば、ベネットのいう「少女から肥つた老婆に變つていく」変化だけが、この小説の全篇を通じて認められる唯一のものであろう。

『老妻物語』のスタイルの自然さは平凡な人生を描く自然さである。そして普通このような自然さはえてして読者を退屈させがちである。しかしこの小説は退屈でない。それは作者ベネットの話術の巧みさや、作中人物を描写するすぐれたテクニックによるが、なにまして作者のユーモアによつて救われているからである。ベネットはたしかに才人であつた。彼の人生につきまとう雰囲気は芸術家のというより世俗的であるが、それはともかくとして彼は小説家としてもまことに器用な人である。彼の話術の巧みさは驚くべきもので、『老妻物語』のような平凡な人生の物語を書きながら、よくもこ

う最後まで読者を引ばつていけるものだと感心する。こと話術に限つていえば、ベネットはモームにも劣らない作家だろう。

また作中人物の描写のテクニックについていえば、例のフローベール流の客観的描写法を中心にしてゐるが、この方法は前作の『五つの町のアナ』において実践して、この『老妻物語』で完全に自家薬籠中のものにしている。しかもコンスタンスやソファイアを客観的描写法で描きながらも、その方法のみにこだわらず、クリッチロウ氏などの副人物を従来の英國流の小説の書き方にしたがつて生き生きと変り物に仕立てているのである。フローベール流の描写法は個人を描いてそこの時代の人間の典型を創造し、人間のリアルな姿にせまる。ベネットはリアリズムのこの方法を「リアリズムは主人公を変り物にすることに反対する。だから私は群衆の中に入れれば目立たなくなるような人物を選ばねばならないとおもつた」という考え方で解釈していた。だが彼は『五つの町のアナ』のときのようにフローベール流の（実は亞流の）リアリズムの背後でかしこまつていなかつた。『老妻物語』では、彼はクリッチロウ氏のごときキャラクタリストイックな人物を自由に創造し、このような副人物達の言動にユーモアのオブラートをませて、主人公の描写を横から引き立たせている。勿論この小説では「主人公を変り物にしない」ことを原則にしていて、キャラクタリストイックな人物の描写は二の次であ

る。これがのちの『クレイハンガー家』(Clayhanger)になるとかなり強く押し出され、『ライシーマン・ステップス』(Riceyman Steps)においては、ロンドンの下町の大げしん坊の夫婦が主人公となるようにまで発展する。

ところで僕は、『老妻物語』のスタイルの自然さを退屈から救つている最大のものはユーモアであると考えている。ベ

ネットの巧みな話術や、人物描写のテクニックもたしかにこの小説の進展をだれさせない役割を果しているだろう。しかし結局はユーモアをこすものではない。僕は、この小説のスタイルの魅力が自然な筆とユーモアとが互に織りなす味わいから生れてきていると言いうるのである。さて、ここで一つの疑問が頭のなかに浮んでくる。この小説のスタイルの自然さはベネットの作中人物に対する素直な愛情があつて出来たのである。そしてユーモアは彼の故郷の町に対する高踏的なスノバリーから生れている。とすればこうしたユーモアがスタイルの自然さと矛盾撞着してそれを傷つけないだろうか。

僕はこの疑問に簡単に答えておこう。彼の小説家としての精神は素直な愛情に重点をおいている。そしてたとえ彼が故郷の町の人に対して高踏的なスノバリーをもつていたとしても、彼の小説家としての才能が（あるいは才人的才能が）上等なユーモアという利巧な表現の仕方でもつて素直な愛情を傷つけないで、かえつてそれに味わいを加えたのであるまいか。

いや——ベネットのリアリズム解釈の浅薄さを救つて、『老

妻物語』に真実性を与えているものは作者の作中人物に対する愛情である。そしてこの小説になんらかの批評精神を与えるものがあるとすれば、作者のユーモア以外にないものである。そのユーモアはもとをただせば作者ベネットの世俗的な虚榮心から発しているものであろうが。

六

最後に結びの言葉を書かねばならない。だが、結びの言葉になつてから僕達が語らねばならない内容があるだろうか。語るつもりならばもつと早くからでも語れたはずだ。僕はいま、結びにもならない結びの言葉を書いて終りにせざるを得ないのである。

——よい小説と楽しめる小説とはかならずしも一致しない。よい小説が楽しめる小説であるときは幸福である。というもののそのような恵まれた一致は稀れであり、よい小説が楽しめる小説といえないときが多いのだ。だがよい小説が楽しめる小説でないときにもよい小説であることに変りない。

よい小説は僕達読者をどきりとさせる。そして否応なしに足をきらうのである。僕達は小説中の人物に魅せられて、小説の世界のなかで自己改造を行う。その小説の第一頁を開けたときと、読みおわったときと、僕達自身が變つたものになつているのである。これは素晴らしいことだ。しかしこれがまた楽しいことであるとは簡単にはいえない。ここに二

つの小説があつたとする。両方とも僕達を魅惑する。だが甲の小説は僕達を突きあはし、僕達の胸を突き刺し、僕達の内なる自我に内部革命を起させる。ところが乙は僕達を魅惑して小説の世界に僕達を吸いこむが、僕達を第一頁を開けたときと同じ姿で送り帰してくれる。僕達は一日か二日のうちに何時間かの間その小説を楽しみ、読みおわるやもとの実人生という古巣に戻つていくのである。勿論甲はよい小説であり、乙は楽しめる小説である。

では、ベネットの『老妻物語』はそのいづれの型に属するだろうか。実は僕はつきり分らないのだ。もしも僕のよい小説と楽しめる小説の区別がそれほど間違つていなかつたら、『老妻物語』のためにこのいづれでもない第三の分類をあらためてつくらねばならないのである。この小説は僕達をどきりとさせないが、そうかつといつて僕達を読まなかつた以前の僕達のままにさせておいてくれないので。何故ならばこの小説におけるベネットの人生哲学は年々人々は年寄つしていくということである。別段僕達は彼の人生観に驚いてどきりとしないだろう。だが僕達が小説中の人生の有為転変を辿りながら、いつかどこかの文章でどきりとしないとは保証しかねるからである。

そのうえ『老妻物語』は楽しめる小説である。モームのいふように、読者が小説に人生の真実や、真実らしいものや、素朴な愛情をもとめるとき、読者は空想や、ロマンスや、サ

スペンスや、驚異にみちた小説よりもこの小説を楽しむだろう。だから『老妻物語』はよい小説で同時に楽しめる小説である。しかしながらこの小説における、よい小説と楽しめる小説との幸福な一致は結びの言葉のはじめに述べた意味の一一致ではない、第三のものであることはいうまでもない。それとも、僕は『老妻物語』という古ぼけた小説を本棚から引き出して、自分の趣味を一寸満足させるために、いまさらめいた鼠臭のひきたおしきしているのだろうか。

〔附記〕 *The Old Wives' Tale* の訳名を『老妻物語』としたがこれはいままで我が國でそう呼ばれてきた習慣に従つたまでである。正しくは "A trivial story such as is told by garrulous old women". である。一言断つておく。

(本学助教授)